



Vol.66

机の上の小さな変革



パラメータの操作

こんにちは、菅俊一です。今回は、さまざまな物の「パラメータを変化させて考える」ということを、みなさんとやってみたいと思います。

それではまず、鉛筆について考えてみましょう。鉛筆には長さ、太さ、重さ、色など、さまざまなパラメータがあります。これらのパラメータから何か1つを指定して増加させてみてください。

「色」であれば、通常は1本の中に1色しかありませんが、「色」を増加させるということは、すなわち1本の鉛筆のなかに複数の色がある状態にする、ということになると思います。

そのうえで、色を増加させた鉛筆を実際に形にするとしたら、どのようなものが考えられるでしょうか。

複数の色を1本のなかに収める方向で考えると、たとえば、芯が複数の色に分割されており、線を引くとさまざまな色が現れるという鉛筆をイメージすることができそうです。

さらに別のパラメータで考えてみましょう。今度は鉛筆の「重さ」を極端に増加させることを想定すると、素材が木ではなく、真鍮になっている鉛筆などが考えられます。柔らかく濃い芯であれば、重量にまかせて書きやすい鉛筆になるかもしれません。

もちろん、鉛筆以外の物でも考えることができます。たとえばコップであれば、「高さ」のパラメータを変化させて伸ばしてみると、花器のような用途にふさわしい器

がイメージできますし、逆に「幅」のパラメータを変化させていくと、金魚鉢のように使える器がイメージできるかもしれません。

ほかにも、コップ自体の「厚さ」のパラメータを変化させていくと、容量は減るかもしれませんが、熱い飲み物を入れても持ちやすいコップが思い浮かびます。

極端な変化を加えて常識を越える

ある物について、何か特定のパラメータを選び、それを変化させてみるという行為。これは、その物に元来備わっている性質を手がかりにしながら、既存の思考の枠組みを外し、それまでにない観点で物を捉え直すという試みでもあります。

いきなり自由にこれまでの既成概念を外して考えることはなかなかできません。しかし、すでにある物のパラメータを変化させることで、普段の思考からは生まれないような着想を得られるようになります。

今回は、鉛筆やコップなど身のまわりの日用品を例に挙げました。同様に、たとえば規則やアイデアなど、形がなくともパラメータを見出して極端に変化させることで、これまでの文脈とはまったく異なる価値を探し出すことができる可能性があります。パラメータを変えて考えることは、既存の物を利用しながら、既存の物を超えるためのアプローチなのです。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。